

Status of antimicrobial use among dentists in Japan

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2014-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 甘利, 悠 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001502

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1439 号

Status of antimicrobial use among dentists in Japan

(歯科領域における抗菌薬使用の実態)

甘利 悠 (あまり ゆう)

博士 (医学)

論文内容の要旨

抗菌薬の不適切な使用に起因する抗菌薬への耐性の出現が世界中で問題となっている。抗菌薬は医師と歯科医師双方により処方されるが、日本の市中の歯科診療所における抗菌薬使用の実態の研究は限られている。本研究では日本全国よりランダムに選定した 500 名の歯科診療所に勤務する歯科医師に対して抗菌薬使用に関するアンケートを用いて調査を行い、252 名の回答 (回答率 50.4%) を得た。患者背景に応じてタイミングや適応を決定するとした回答は 51 名 (20.2%) に留まった一方、歯科処置の種類や患者の背景を問わず処置前および後に抗菌薬を処方するとした回答がそれぞれ 31 名 (21.3%) と 169 名 (66.7%) であった。227 名 (90.0%) が処方期間を 3-4 日間と回答した。最も多くの歯科医師に選択された経口抗菌薬は第 3 世代セフェム系抗菌薬 (129 名, 51.2%) であり、続いて第 1 世代セフェム系抗菌薬 (34 名, 13.5%)、ペニシリン系抗菌薬 (30 名, 11.9%)、マクロライド系抗菌薬 (29 名, 11.5%)、ニューキノロン系抗菌薬 (14 名, 5.6%) であった。以上の結果から、感染性心内膜炎予防のためのガイドラインよりも過剰な抗菌薬の予防投与が行われており、また推奨期間より長く投与されていることが明らかとなった。さらに、口腔内嫌気性菌に対する活性が低い経口第 3 世代セフェム系抗菌薬が最も広く選択されていることも判明した。既存の予防投与のためのガイドラインの周知や、治療の失敗や抗菌薬耐性菌の出現を防ぐためのより適切な抗菌薬の選択のため、歯科と医科の間のより密な連携が望まれる。